

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 「再構」再考：日本言語学史の一断面

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-07-16 キーワード (Ja): キーワード (En): Reconstruction, SAIKEN, SAIKŌ, Shirō Hattori, History of linguistics in Japan 作成者: 長田, 俊樹, OSADA, Toshiki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003436">https://doi.org/10.15084/00003436</a>

## 「再構」再考 ——日本言語学史の一断面——

長田俊樹

国立国語研究所 研究系 言語変異研究領域 客員教授

### 要旨

比較言語学の用語である Reconstruction の訳語は、「再構」とも「再建」とも使用されている。服部四郎は 1950 年代半ばから亡くなるまで「再構」を使ってきたが、2018 年に出版された『日本祖語の再建』では「再建」となっている。その補注をおこなった上野善道は「再構」が服部によって導入された訳語との認識を示したが、小論ではそれを検証した。その結果、「再構」の初出はソシュールの翻訳『言語学原論』（1928）で小林英夫が使用したもので、ほぼ同時期に、泉井久之助、新村出など、京都大学出身者によって使用されるようになった。一方、「再建」は新村がイエスペルセンを訳出した 1901 年が初出であった。また、「再造」「再現出」などの訳語もみられた\*。

**キーワード**：Reconstruction, 再構, 再建, 服部四郎, 日本言語学史

### 1. はじめに

筆者は日本言語学史を執筆することをめざしているが、小論もその一部である<sup>1</sup>。

1886 年、帝国大学（のちの東京大学）に博言学科が誕生した。それが日本に言語学が導入された時だと考えられている。もちろん、それ以前の国学や洋学において、言語学的研究はおこなわれてきた。しかし、体系的に、言語学という学問が成立したのはこの博言学科の誕生とみなすのが一般的である。爾来、日本の言語学は主に欧米の言語理論を導入することで発展してきた。

言語学史は言語理論の歴史でもある。理論が変われば言語学用語も変わる。昨日は Prototypical と言っていたのが、今日では Canonical と呼びなおしたりすることが日常茶飯事である。いずれも、言語学で普通に使っている「名詞」や「動詞」の中心的な部分を指そうとすると、に、「いわゆる」とかいったあいまいさを許さず、正真正銘の「名詞」や「動詞」を指そうとして使用される用語である。しかし、それですら、あいまいさは消えない。すごく大雑把な言い方が許されるのであれば、主語-目的語の代わりに、意味に注目して、Actor-Patient と言っていたのが、別の言語理論では Actor-Undergoer と変わってしまう。つまり、言語理論と言語学用語は大変密接な関係を持っている。

\* 小論の草稿段階で、以下の方々からコメントやタイポの指摘を受けた。上野善道、千田俊太郎、藤原敬介、丸山徹（敬称略）。名をあげて感謝したい。とくに、上野東大名誉教授と千田京大准教授からは貴重なコメントをいただき、小論に反映させることができた。なお、小論は以下の研究プロジェクトの成果である。European Research Council Advanced Grant Project “An etymological dictionary of the Japonic languages” by Alexander Vovin.

<sup>1</sup> すでに、これまでに長田（2003, 2005, 2017, 2020）を発表してきた。また、『上田万年論』の原稿を書き上げていて、現在、出版社を探しているところである。

日本だけでなく、世界的に言語理論には、やりすたりがある。筆者が言語学を学びはじめたのは1970年代のことだ。それから今日まで、生成文法をはじめ、多くの文法理論が提唱されてきた。生成文法は演繹的なモデルであり、初期理論から標準理論、GB理論、ミニマリスト理論と形を変え提唱され続けている。また、フィルモアの提唱した格文法（Fillmore 1968、フィルモア 1988）やラムの提唱した成層文法（Lamb 1966）、あるいは日本ではほとんど話題にすらならなかったスタロスタの語彙格文法（Starosta 1988）など、今では言語学史の一コマとしてのみ論じられる文法理論もある<sup>2</sup>。

どんな言語理論に基づいて記述するか。それが大きな問題であることはまちがいない。それと並んで、日本においては言語学用語の訳語についても、非常に頭を悩ませる。自分の経験を述べると、最初に書いた論文は英語で書いたもの（Osada 1991）を日本語に書き直したもの（長田 1991）だったが<sup>3</sup>、タイトルにある linguistic convergence を「言語輻合」と訳した。この訳語は何かに依拠したのだが、今は思い出せない<sup>4</sup>。現在、「言語輻合」という用語は全く使用されない。亀井・千野・河野編『言語学大辞典（術語編）』に従えば「言語収束」あるいは「言語収束的発達」となる。

また、長田（1991）ではエメノーの提唱した Linguistic Area を「言語地域」と訳したが、のちには一般的な「言語領域」に変更した。言語学用語への正しい理解があれば、訳語を変更することは一向にかまわない。むしろ、『言語学大辞典（術語編）』のようなスタンダードとなるものがあれば、それに準拠することで訳語の問題は解決できると筆者は考える。

小論は比較言語学用語である Reconstruction の訳語について述べる。

「再構」と「再建」の両方が使われている。そのちがいは何に基づくものなのか。小論ではそれを検証したい。ちなみに、筆者は「再構」と教えられたので<sup>5</sup>、長田（1997）では「再構」と使った。しかし、その後は『言語学大辞典（術語編）』の用語に統一することで、意識的に「再建」に変更した（長田 1998）。長田編（2020）では、編者として「再建」で統一することを執筆者全員に要請したほどである。この個人的関心が小論の執筆動機である<sup>6</sup>。

<sup>2</sup> スタロスタは、筆者の専門であるムンダ諸語の一つソーラー語の研究者なので（Starosta 1967）、お目にかかったことがあり、語彙格文法の存在を知ることができた。

<sup>3</sup> 当時、インドから帰国して日本での所属がなかったため、論文を掲載してくれるところがなかったが、その当時神戸市外大におられた庄垣内正弘さんのおかげで出版できたことを思い出す。亡くなられた庄垣内さんの御霊の鎮魂を込めてこの場を借りて感謝申し上げる。なお、筆者と庄垣内さんの関係についてはすでに長田（2015）で書いた。

<sup>4</sup> グリーンバーグ（1973）の巻末に掲げられている術語対照表をみると、「convergent 輻合的」（199頁）と出ているので、この用語を使ったのではないかと推測されるが、はっきりとした記憶はない。

<sup>5</sup> 筆者は北海道大学で池上二良教授の講義の中で「再構」と教えられた。なお、池上教授は服部四郎教授の教え子にあたる。

<sup>6</sup> もう一つ理由がある。私事で恐縮であるが、亡父・長田夏樹の処女作が18歳の時に書いた「日本語再建私説」（1939）である。愛知県立大学の吉池孝一教授のご厚意で『KOTONOHA』100号に掲載していただき、わたしも『「日本語再建私説」解題』を書いている（長田 2011）。この不思議な縁もあって、ここに「再構」「再建」問題をまとめた次第である。なお、蛇足ながら、長田夏樹（1972: 30）をみると、「再構」となっている。

## 2. Reconstruction の訳語：服部四郎による「再構」と「再建」

服部四郎『日本語の再建』（岩波書店）が2018年に岩波書店から上梓された。

上野善道による親切な解説、行きとどいた補注が施されている。その上野が「補注者あとがき」で、出版の企画を聞かされたときの感想を、次のように述べている。

これには二重の衝撃を受けた。すでに一度は企画が通っていたということと、題名に「再建」とあったことである。前者は私に関わることはないが、題名の方はそこに「日本語」が入るのは当然として、「再建」が使われるとは全く想定しなかったからである。（中略）

言語学科に進学した1967年の「言語学概論」で「再構」という用語を教わって以来、先生は晩年まで一貫して「再構」を使い続けていたものと思い込んでいた。「再建／再構」の用語をめぐる話は、講義中にもそのあとにも聞いた記憶はない。ただ、「微視的でアトミックな」従来の「再建」方法に飽き足らぬ思いを抱いていた先生は、自らの研究の中核をなす「体系・構造」の考えに基づいて、「巨視的で構造的な」あるべき reconstruction という意図で「再構」という用語をあえて導入したに違いないと受けとめていた。（上野 2018: 641-642）

服部は Reconstruction の訳語にずっと「再構」を使ってきた。しかしながら、この本の題名が「再建」となっている。そのことに、上野は衝撃を受けたのである。その衝撃が大きかったので、上野は服部四郎の論文を丹念に調べた。その結果、「当初は一般的な用語の「再建」を使っていたが、1955年ごろから「再構」に変わっていた」（上野 2018: 643）ことがあきらかになった。ただし、1962年に出版された「日本語の系統」（『日本語の再建』の2番目に掲載されている）と題する論文だけ「再建」が使われている。

服部はなぜ晩年になって「再構」を「再建」と改めたのか。上野は次のような推測をしている。

「祖語の再構」「日本語の再構する」と言ったつもりが、「祖語の再考」「日本語を再考する」と誤解された苦い経験が先生にはあったのではなかろうか。先生の用語をよく知らない人はそう取る方がむしろ自然でさえある。（上野 2018: 643）

上野は実際に、そうした誤植の例を見つけ出して、その個所をあげた後に、こう述べている。

編集担当者あたりが誤解して手を入れてしまった蓋然性が高い。このような経験が（あるいは複数回）あって、「再構」を断念して「再建」に戻ったのではなかろうか。どんなに良い内容であっても他人にきちんと伝わらなくては意味がない、というのが先生の日頃の主張であった。（上野 2018: 644）

上野の推測はあくまでも推測であって、確証があるわけではない。服部四郎が亡くなってし

まった今となつては、確認する手立てはない。

小論は上野の推測をとりあげるのではない。Reconstruction の訳語として、「再構」と「再建」の使われ方を言語学史的に検討するのが目的である。上野は「[体系・構造]」の考えに基づいて、「巨視的で構造的な」あるべき reconstruction という意図で「再構」という用語を服部が導入したとみている。つまり、これまでの「[微視的でアトミックな]」従来の「再建」方法に飽き足らず、服部自身が新しい用語として「再構」を導入したとみなしていることになる。

しかし、日本言語学史をひもとくと、服部が「再構」を新しい訳語として導入したのではない。

### 3. 日本言語学史上からみた Reconstruction の訳語：明治時代

1886年、帝国大学（のちの東京大学）に博言学科が誕生した。

最初に博言学科を担当したのは、お雇い外国人教師、チェンバレン（1850-1935）である。チェンバレンは1873年、お雇い外国人として来日し、74年から82年までは海軍兵学寮で英語を教えていた。『日本小文典』（1887）を著すなど、日本語の口語文法の確立につとめ、『日本事物誌』（東洋文庫で読める）による日本紹介や『古事記』の英訳をおこなったことで知られる。チェンバレンの伝記を書いた楠家（1986: 219）によると、文部大臣森有礼は英国公使時代からチェンバレンと親交があり、その当時の文科大学長外山正一の働きかけと森の推薦によって、チェンバレンが帝国大学に招聘されたという。チェンバレンは『古事記』の英訳をおこなっていたが、言語学については学んではいなかった。いわば「日本学」研究者を言語学の教授として招いたことになる。

チェンバレンはどんな授業をし、だれが受講したのか。

堀川（1992）によると、授業は週1時間で、教科書として明治19年度と20年度はFriedrich Müller（1876）を使用し、21年度はWilliam D. Whitney（1875）を使用している。また、受講した学生は明治19年度が三名（上田万年、高津鋳三郎、三上参次）、21年度は二名（林外吉（後に曾登吉）、岡倉由三郎）の、たった五名である<sup>7</sup>。言語学が導入されたといっても、新しい学問を学ぼうという人は少なかった。このうち、上田と高津、三上は和文学科の学生であり、岡倉は選科の学生で、正式な博言学科の学生は林一人だった。

チェンバレンが教科書とした二つの本とその著者について述べておく。

まず、フリードリッヒ・ミュラー（1834-98）については、宗教学者として有名なフリードリッヒ・マックス＝ミュラー（1823-1900）と混同されがちだ<sup>8</sup>。ミュラーはオーストリア出身でウィーン大学の比較言語学教授を務め、彼の大著、*Grundriss der Sprachwissenschaft* は四部七冊で、その第一冊目が言語学入門として教科書として使われていた。1924年に出版されたペデルセンの『言語学史』では「（非印欧語族の）研究分野の全体を抱合する19世紀唯一の労作」（ペデルセン1974: 97）と高く評価し、こう指摘している。

<sup>7</sup> 林以外は後アカデミズムで活躍する。林外吉は外交官となる。評論家の林達夫の父である。

<sup>8</sup> 堀川（1992: 17）の注4では、フリードリッヒ・ミュラーとマックス＝ミュラーを間違えている。『上田万年言語学』を校注した柴田（1975）では、索引で、二人を同じ人物として扱っている。

その一般的序論の1節で諸言語のすべてにわたる系統的概観を試み、各専門分野の主要文献に言及しており、以下数巻にわたり、多数の典型的言語についての素描が与えられている。これら素描は短いながら、それぞれ取りあげた言語の特徴をよく伝え、原則として見本が添えられている。(ペデルセン 1974: 98)

しかし、この本には決定的な問題があった。ペデルセンもそのことをよく理解していたようで、続けてこうも指摘している。ミュラーは「人種の違いによる言語の別を立て」、「ちぢれ毛、直毛、巻毛型の人種が用いる言語を分けている」が、「しかし言語と人種のあいだには何か本来的な結びつきがあると考えるはいけぬ」と指摘している(ペデルセン 1974: 99)。人種と言語の区別がなく、人種差別を助長しかねない内容なので、現在ではまったく顧みられなくなった。ヨーロッパの言語学史、ロウビンズ(1992)などにも名前は登場しない。

なお、このミュラーの問題点をいち早く指摘した、日本の言語学者がいる。藤岡勝二(1872-1935)である。藤岡(1907)は以下のように述べている。

フリードリヒ、ミュレルといふヴィーンの人種学教授は人類分類と言語分類との二つを相互に用ゐることをした。けれどもこれ亦一種の分類法として存する迄であつて、必しも言語を分類するに人種の名をとつて以てそれで当れりとするは出来ない。(藤岡 1907: 22-23)

一方のホイットニー(1827-94)は言語学史には必ずといっていいほど登場する言語学者である。イエール大学の言語学教授であり、アメリカ言語学協会(American Philological Association)の設立者であり、初代会長を務めた。近代言語学の父、ソシュールに影響を与えた言語学者として、現代でも高く評価されている。Whitney(1875)は現在でも古典的名著として出版されていて、言語学の歴史には欠かせない名著である。言語思想史の立場からいえば、初代文部大臣森有禮と英語公用語化をめぐる、森をたしなめる書簡を送ったことで知られている。

日本の言語学草創期に影響を与えた言語学者として、上であげたミュラーとホイットニー以外に、オックスフォード大学の比較言語学教授であったマックス＝ミュラーとその後任であるセイスがいる。上田万年の留学前の論文を丹念に見ると、それぞれMax Müller(1885)とSayce(1874)への言及が多くみられる。また、ヘルマン・パウエル(Paul 1880、および英訳書Strong 1888)が与えた影響も大きい。現に、Whitney(1875)は保科孝一によって抄訳され(ホイットニー 1899)、Max Müller(1885)は金沢庄三郎と後藤朝太郎によって翻訳され(ミュラー 1906、1907)、セイスは上田万年と金沢庄三郎の共訳の形で出版されている(セイス 1898)。また、パウエルの英訳本であるStrong(1888)から八杉貞利が訳出している(ストロング 1901)。

Reconstructionに関連していえば、Whitney(1875)を全文検索しても、reconstructを含めて、一度も出てこない。Strong(1888)では、二か所にでてくるが、ここで問題となっている意味での使用はされていない。Max Müller(1885)の全文検索では1か所にreconstructとして登場する。

また、最も頻繁に出てくるのは Sayce (1874) で 4 回を数える。しかし、訳文が文語体で、しかも抄訳が多いため、これらに対応する訳は確認できなかった<sup>9</sup>。

日本人による言語学とついた最初の本は岡倉由三郎 (1868-1936) による『比較博言学』(1892) である。ただし、この本は『日本語学一斑』(1890) として出版された本を単に題名を変えただけで、Reconstruction への言及はない。

日本の言語学創始者である上田万年 (1867-1937) が西洋から帰国して、若干 27 歳で帝国大学博言学科の主任教授に就いたのは 1894 年のことである。1898 年には言語学会 (ただし現在の日本言語学会とは別の組織である) が設立され、1900 年には博言学科が言語学科と改称して今日に至る。その二十世紀に入る前後には、上田の弟子たちによる言語学入門書が多く出版されている。その口火を切ったのは八杉貞利 (1876-1966) である。宮田修の名前で 1899 年に出版された『通俗言語学』である<sup>10</sup>。その後、保科孝一 (1872-1955) が続き (保科 1900, 1902), 藤岡勝二の哲学館での講義テキスト (藤岡 1900) などが刊行されている。いずれも国会図書館デジタルライブラリーで読める。しかし、これらには Reconstruction の訳語は出てこない。

筆者が確認できた一番古い Reconstruction の訳語は、Jespersen (1894) を訳した新村出 (1876-1967) による「再建」である。

吾人はこの八派の姉妹語を生みたる母語が、今より幾千年前に、何処に於て話されたるものなるかに就て、未だ正確なる知識を有せずと雖も、伝来の諸姉妹語の上に遣りたる姿を比較して、その母語の面影を推定し、以て原語の構造を再建することを得たり。(イエスベルセン 1901: 3-4)

「この八派」とあるが、これは印欧語族の語派のことを示している。また、ここで使用されている「原語」とは、今の用語でいうところの「祖語」のことである。

次に訳語が確認できたのは、Sweet (1900) を訳した金田一京助 (1882-1971) である。

然るに、いはゆる比較言語学といふものは、丁度今述べたやうな行き方で、梵語・希臘語・拉丁語・英語等の比較から、或る程度まで此の古い祖先語を再建し、そして、一つ一つの単語は勿論、大凡の文法などまでも推知するのである。(スウィート 1912: 21)

<sup>9</sup> 千田俊太郎京大准教授のご教示によると、Sayce (1874: 344) 'Analogy shows itself as a creative and reconstructing principle' の訳が「類推はまた言語の材料を創作再造することあり」(セース 1898: 250) とあるとの指摘を受けた。比較言語学の Reconstruction とは意味が違うが、「再造」の訳語があることになる。

<sup>10</sup> 徳永 (1975: 352) によると、「この著 (= 『通俗言語学』) は宮田修氏の名義になっているが、八杉先生の日記によれば、先生の執筆になる」と述べている。伊藤 (2001: 40) によると、「学者として上田万年さんに気の毒なことが二つある。一つは、東大で講義した国語学史を、弟子の保科孝一君がそのまま自分の『国語学小史』として出版したことだ。もう一つは、早稲田で講義した言語学を、宮田修が『通俗言語学』と題して出版したことである。もっともあとの方の件は人の噂話だから、確実ではないが、ありそうなことのように思われる」とある。この伊藤があげた宮田修は成女高等女学校の校長を務めた教育者で、八杉の筆名と同姓同名の方がいたことになる。なお、保科が上田の講義を盗んだかどうかについては、古田東朔が丹念に検証し、「上田博士の見解と同じではない」(古田東朔 1984: 314) としている。

この本には「第六章印度欧羅巴語」の「第三節 其の時代」に、小見出しとして「[原始印欧語]の再建」(317頁)がある。ただし、その後の言語学史をみていけばあきらかになるが、この「再建」が定着したのかどうかは疑わしい。この金田一の自序には「本書の訳語其の他に就ては平素藤岡勝二先生の高教に俟つ所多かつた」(2頁)とあることから、藤岡の用語であったのかもしれない。

以上が、明治時代の Reconstruction の訳語についての考察である。

#### 4. 日本言語学史上からみた Reconstruction の訳語：昭和時代の戦前まで

服部は『日本語の系統』の冒頭で次のように述べている。

私は日本語の系統に興味を持って言語学を始めたと言っても過言ではない。初期の暗中摸索時代に安藤正次先生の『言語学概論』のような穏健な書物をひもとき得たことは非常に幸福であった。しかも私は、この書物を友人の書棚から借りて読んだのであった。もし日本語の系統について、わからないことをわかったかのように独断的に書いた書物を最初に読んでいたとしたならば、初学者の私とその欺瞞を見破るのにかなりの時間を要したかも知れない。しかしこの本には、「日本語と朝鮮語とは、ウラル・アルタイ語族に属するものであるかどうかの問題である」(93頁)と書いてあった。日本語の系統が未詳であることを知った青年は、それを知りたいという非常に強い欲求にかりたてられたのであった。(服部 1959:i)

そこで、まず安藤正次『言語学概論』からみておこう。

安藤正次(1878-1952)は神宮皇學館本科を出た後、上田万年に私淑して、しばらく上田の家に書生として生活していた<sup>11</sup>。1904年東京帝国大学文科大学選科を修了と同時に、神宮皇學館教授となり、後に台湾に渡り、1941年から台北帝国大学の総長を務め、戦後は東洋大学教授をつとめた。国立国語研究所の設立にもかかわった。

安藤による Reconstruction の訳語は、筆者にはまったくなじみのないものだ。

一方に於て、これ等の諸語に共通な成分として古くから伝はつてゐる言語上の遺物の調査から、原始アリヤン民族の文化を明らかにし更に進んでは、今日のやうに各地方に分散しない以前の原始アリヤン民族の原住地を確かめようといふ研究が進んで来ると共に、インド・セルマン語族の祖語の再造となつてあらはれて来た。(安藤 1926: 293-294)

<sup>11</sup> 円地文子(1984: 15-16)によると、「私の家では、書生さんというのは(中略)みんな学問をして出世していく人」であって、「その中には後の台湾大学の総長になったA氏などもあった」と述べているが、このA氏はまちがいに安藤正次である。

この「再造」には「レコンストラクション」とフリガナがつけられている<sup>12</sup>。明治以来、西洋から学問が導入される際に、学術用語の和訳には先人たちがずいぶんと苦勞した。和訳の際に利用された辞書の一つに、Lobscheidの「英華字典」がある（ロブスチード（羅布存徳）原著、井上哲次郎訂増（1883）『増訂英華字典』）。そこには「Reconstruct 再造，複製」とある。つまり、安藤が独自に編み出したものではないのかもしれない。いずれにせよ、「再造」は筆者の知る限り、他の言語学者が使用している例を知らない。また、安藤の他の著作（安藤 1924, 1948）にも見当たらない。

昭和初期に、明治書院の国語科学講座や岩波講座日本文学などの講座ものが出版される。

その中に、いくつか言語学関連のものがある<sup>13</sup>。Reconstruction は比較言語学の用語であるが、そのものずばりの福島（のちの辻）直四郎（1899-1979）による『比較言語学』がある。そこで Reconstruction は「再現出」と訳されている。

比較方法は共通基礎語を全般的に再現出し、これを用ひて文章を綴り、或は之を会話に用ひて発音の正確を期するものではない。吾人の有する資料と吾人の用ひる研究法とは決してかゝる意味の再現出を可能ならしむるものではない。然し比較研究法の究竟する所は再現出にあり、又再現出は比較によつてのみ行はれ得るものであるから、比較による再現出の意味と価値とを充分に知つておかねばならぬ。（福島 1934: 18-19）

この「再現出」も他の使用例を知らない。辻（その当時はまだ福島姓）は翌年、岩波講座東洋思潮の1冊として、『印度言語の系統』を刊行しているが、そこには「再現出」の用語はない。また、Reconstruction にあたるような用語も見あたらない。

ご存じのように、辻（=福島）はインド学の研究で名をはせている。その後、比較言語学について述べたものを筆者は知らない。同じ題名の『比較言語学』（高津春繁 1942）の序文を書いているぐらいであるが、そこには「再現出」はない<sup>14</sup>。後に述べるように、その高津は「再建」を使用している。

管見によれば、翻訳書以外で、「再構」の用語が見いだされるのは新村出『言語学概説』である。

原ゲルマン語は事実上今日に残つてゐない言語である。たゞ、同一の祖語に属する諸方言の比較によつて再構せられるのにすぎない。故に祖語の再構は比較言語学の業績の集積であり、エッセンスであると称することも出来る。（新村 1933a: 4-5 頁）

<sup>12</sup> 本文で述べたように、筆者には「再造」という単語にはまったくなじみがない。明治時代の辞書を見ていると、Lobscheid（1866-69）『英華字典』に、「Reconstruct 再造，複製」がみられるので、中国語では今でもよく使われるようだ。また、明治初期、サミュエル・スマイズの「Self Help」を中村正直が翻訳した有名な『西国立志編』に「理学算術を学び、精神を再造せり、と云えり」と出てくる。さらに、『日本国語大辞典』には「再びつくること。改めてつくりなおすこと。再建。再興」と意味が掲載されていて、初出は『文明本節用集』（室町中期）とある。もとは漢語だとしても、かなり前に日本に定着した言葉である。

<sup>13</sup> 具体的な題目については福井（1942: 471-484）に一覧表で示されている。

<sup>14</sup> ずっとのちの執筆だが、辻直四郎（1967: 30）には「文化史的に価値のある語彙を再建し」と「再建」が使われている。

この『言語学概説』は『続国文学講座』として1929年から1931年まで連載されたものである。したがって、初出年はもう少し早くなる。また、泉井「私の処女出版」によると<sup>15</sup>、この『言語学概説』についてこう述べられている。

私の最初の著作はと、きかれれば、『言語学概説』と答えるよりほかはない。この本は少し名をかえて今日も行われている。そしてそれは新村先生の名で出たが、もう今となってはこれを世間にもよかろうと思う。私は学生のころ、言語学の第一線の書物は古いものもたいがい読みあさっていて、私なりに概説的な構想を持っていた。卒業してすぐ先生のおすすめによってこれを書いたが、これは私にとって大変なためになったと思う。当時の最も新しい学説の上に私の考えをたてたもので、素朴ながらもセマンテーム・モルフエームの概説を導入して操作したのもこれがさいしょではなかったかと思っている。(泉井1951:2)

新村の名で泉井が執筆したと泉井本人が書いている。まだ新村の生きているときなので、この話は本当なのだろう。すでに、長田(2003:403)で、上田万年が名前貸しをした『大日本国語辞典』(松井簡次との共著)や『近松語彙』(樋口慶千代との共著)を取り上げたが、新村もその伝統に従ったのかもしれない。共著とせず、泉井の「い」の字もないのだから、上田よりもひどいかもしれない。

泉井が「この本は少し名をかえて今日も行われている」と指摘するように、『言語学概説』(発行者は国文学講座刊行会)は書名を変えて、何度も出版されている。二年後には『言語学概論』として、発行者を国文学大講座刊行会と変えて出版されている(新村1935a)。同じタイトルである『言語学概論』は岩波講座の1冊としても刊行されている(新村1933b)。同一人物が同一タイトルで、違った内容の本が出版される。今からみると、非常に奇妙なことがまかり通っていたことになる。さらに、この二冊の『言語学概論』を一つにまとめて、『言語学序説』として刊行されている(新村1943)。これが戦後に改定されて出版されたが(新村1954)、その際には岩波講座の部分は削除されている<sup>16</sup>。

<sup>15</sup> この新聞記事をコピーして送ってくださった藤原敬介京大特定准教授に感謝する。

<sup>16</sup> この『言語学概説』は新村の全集には掲載されておらず、それを根拠に京大山口研究室編「泉井久之助著書論文目録」(1997)に泉井の著作として掲載されている。ただし、新村出全集の編集委員代表は泉井久之助である。したがって、泉井が外した可能性が高い。しかし、山口研究室編では「私の処女出版」には言及されていない。ただ、新村(1943)の序文には「筆録に修訂に校正に、京都帝国大学文学部の泉井久之助助教授および松平千秋講師から並々ならぬ助力を受けたことに対して私は深甚なる感謝の意を表する」とあり、もし泉井の著作とするのであれば、松平千秋との分担はどのようなかたちだったのだろうか、疑問が残る。なお、崎山(2014)によると、「1943年、『言語学序説』が新村出の名で刊行されているが、先生はこれが処女出版であるという記事を書いておられる」とあるが、『言語学序説』ではなく、『言語学概説』の誤りである。なお、『言語学序説』には、岩波講座の『言語学概論』で書かれた内容が付録として「日本言語学私観」として付け加わっているが、こちらは内容からいっても、また新村全集にも再録されていることから、新村が書いたものであろう。泉井がどの程度まで、『言語学概説』執筆に関わったか、定かではないが、この新村が書いた「日本言語学私観」への言及は一切ない。すんなりと泉井が書いたと思えないのは、ひとえに泉井の文体とはかなり異なるからである。千田准教授によると、この『言語学概説』は「必ずしも出典が示されておらずに複数の外国文献を参照した跡が見える」(メールによる)と述べている。今後の検証が必要である。

泉井が『言語学概説』を執筆したとしたら、泉井が「再構」を使った最初のように思われるが、この後述べるように、ソシュールの訳者小林英夫の方が古い。

『言語学概説』の問題はともかくとして、新村は同時期に出された『国語系統論』（新村出 1935b）においても、「再構」を使用している。また、明治書院の国語科学講座をみると、小林淳男（1933: 68）では「再建」が使われ、江（1935: 31）は「再構」を使っている。小林淳男（1896-1978）は東大英文科卒で東北大学教授、一方江実（1904-89）は京大言語学科卒で岡山大学教授だった。江は新村の門下生である。昭和初期の段階で、新村門下生が「再構」を使用していたことだけは間違いない。

##### 5. 日本言語学史上もっとも影響を与えた訳書：ソシュール、サピア、メイエ

戦前に最初の邦訳が出たが、戦後にわたって読み継がれた訳本がある。ソシュール『一般言語学講義』（小林英夫訳『言語学原論』1928）であり、メイエ『史的言語学に於ける比較の方法』（泉井久之助訳 1934）であり、サピア『言語』（木坂千秋訳 1943）である。いずれも、訳者ご本人が改訳した本を出版したり、別の方が訳したりして、今日でも読まれている<sup>17</sup>。

まず、ソシュールをみていこう。

小林英夫（1903-1978）の訳業は弱冠 25 歳の 1928 年、『言語学原論』の題名で岡書院から出版されている<sup>18</sup>。岡書院版をみると、「再建」と「再構」がどちらもみられる。

比較文法は己の爲した近寄せが何処に帰着し、発見せる関係が何を意味するかを会て自ら問ふた事がない事である。史的ならずして単へに比較的であつた。むしろ比較法は凡ゆる史的再建には欠くべからざる要件である。（ソッスユール 1928: 9）

この「史的再建」には「ルコンステイテユシオン」とルビがあり、restitutions の訳語であることがわかる。一方、次のような一節がある。

再構の唯一手段が比較法であるならば、逆に、比較には再構 reconstruction 以外の目的は無い筈である。（ソッスユール 1928: 449）

ここでは、reconstruction の訳語に再構が使われている。じじつ、索引には「再構 reconstruction」（548 頁）が掲載されている。このソッスユール（1928）には、「再構」も「再建」も登場する。

<sup>17</sup> 小林英夫は『言語学原論』として何版も重ねた後、小林英夫訳『一般言語学講義』として、1972年に改訳新版を出したのをはじめ、町田健（2016）が新訳として出版している。様々な講義記録を含めると、山内貴美夫訳（1976）、前田英樹訳注（1991）など、多くの翻訳が出ている。またメイエについては、泉井訳（1977）として、新版を出している。サピアは泉井久之助訳（1957）、そして安藤貞雄訳（1998）が岩波文庫から出ている。

<sup>18</sup> 手元に、岡書院版がなかったが、藤原京大特定准教授が図書館より借りて、コピーしてくださった。ここに名をあげて感謝申し上げる。

小林は1940年に『言語学原論（改訳新版）』を岩波書店から出版する。その出版後に、「言語学原論注釈」という長い論文を言語学会の機関紙である『言語研究』に掲載し、再建と再構の違いを説明している。少し長くなるが、そちらを引用しておく。

史的再建—原<sup>19</sup>reconstitution historique. S. は再建（動詞：reconstituer）と再構（動詞：reconstruire）とを全く同義語として用ひてをり、第V篇第3章 §2 (p.296) の表題において原 reconstitutions とあるに對し、目次では reconstructions となつてをり、この食違ひは初版本以来訂正を受けてゐない程である（私は原書再版の正誤表を作製し、編者に送呈したに拘らず、第3版において一向顧られなかつたことは遺憾である）。しかし私としては再建の方は体系的事實に係はらしめ再構の方は要素的事実即ち語、語形、音韻等に係はらしめたい（cf. 方法論考 p.489）。それはともかくとして私は語義のニュアンスを移すため、原語の reconstitution はつねに再建、reconstruction はつねに再構と訳した。

ついでながらここで一連の類語をあげておく。本書では以上の二語のほかになほ次の如き語が用ひられてゐるが、むろん明確な術語といふよりむしろ比喩的に用ひられてゐるのである。「復原」(retablir, retablissement. 199.-8, 203.-5, 293.5), 「建直す」(retablir. 215.-1), 「復旧」(restituer, restitution. 295.9, 296.9), 「修復」(restaurer, restauration.) (小林 1942: 104)

一見、「再建」と「再構」が並立しているように見えるが、小林は原書に違いがあることを示している。前者が reconstitution に、後者は reconstruction に対応させていることがわかる。上でみたように、岡書院版でもルビや原語表記で違いを示していた。しかも、小林（1942）の説明では「再建の方は体系的事實に」関係させ、「再構の方は要素的事実即ち語、語形、音韻等に」関係させたいとして、意味に若干違いを出させている。服部の「再構」が上野の言うように、「体系・構造」を考えているとしたら、小林とは正反対である。ただ、この小林の訳注は服部が「再構」を使用する契機になったかもしれない。

なお、小林はこのソシュールの翻訳改訳新版を出版する以前に、1937年、『言語学通論』をだしているが、こちらは、再構法 [reconstruction] と再構形 [forme reconstruite] を使用している。上であげた小林の原則に従うならば、後者は再建形とすべきである。

訳書を除いた言語学と名のつく本において、「再構」が最初に掲載されたのは『言語学概説』である。これは新村出の名で出版されているが、じつは泉井久之助が書いたものだという。この泉井の「再構」と小林訳書における「再構」のどちらが古いのであろうか。

それを知る格好の泉井の文章がある。京都帝国大学新聞に掲載された「小林英夫氏訳 ソツスユール言語学原論を讀みて」である<sup>20</sup>。

ここに、「再構」が登場する。

<sup>19</sup> ここにある「原」とは原書を指している。

<sup>20</sup> このファイルの存在をご教示くださったのは、千田京大准教授である。名をあげて謝意を示したい。

各々の方言を歴史的に遡る時は、我々はその結果を比較する事に依つてこの共通語を再構する事ができるであらう。原語の再構は通時言語学及び地理言語学の重要な応用的方面であり、言語学そのもの、仕事が全く此の事業のためにのみ行はれて言語学の存在が単にこれに依つて認められてゐたこともあつた。(泉井 1928b: 4)

この書評での「再構」は、小林訳の「再構」を使っているとみてよかろう。小林の訳によって「再構」が使われるようになり、泉井がそれを使用し、新村門下がすべて「再構」を使いだした。これが日本語による言語学用語としての「再構」が使われていく歴史である。

つぎに、メイエをみておこう。

泉井久之助(1905-1983)の訳業も二十代でなされた。泉井自身が書評で「再構」と使用しているのを上で見たが、その後、泉井は「再構」を一貫して使用しているわけではない。メイエ(1934)の「第二章共通原語」の冒頭には「原語の再建」という小見出しがある。しかし、その文章では「再建」と「再構」が共存している。

細目の事実を他の細目的事実に引当てるのではなく、一個全体の言語体系を他の体系とをひきあてなければならない。勿論かかる一言語の全体を比較の手續によつて再建する事は常に必ずしも可能な事ではない。のみならず如何なる場合にも必ず単一決定的なる原語を再構出来なければならぬと、アプリオーリに確言する事も出来ないかも知れない。しかし比較が完全に成功した場合には、我々はこれによつて原語の再建に到達する事が出来る。(メイエ 1934: 19)

しかし一かくの如く深刻な結果を齎す並行的改新が多数に行はれて比較言語学者の行ふ再建の完全性を妨げてはゐるにしても、再構の基底には仲々どうして、やはり一の正鴻さがある。(メイエ 1934: 22)

後者の原文を見ると、こうある。

Mais, si des innovations parallèles, graves et nombreuses, empêchent la restitution des comparatistes d'être complète, à beaucoup près, il y a, au fond de la restitution, une justesse. (Meillet 1925: 14-15)

筆者はフランス語が全くできないが、メイエのフランス語原文と比べてみると、la restitutionを再構と再建の両方に訳していることがわかる<sup>21</sup>。ここで「再構」と「再建」が共存することは、ソシュールの原文の違いを訳に反映させている小林英夫の場合とはことなり、泉井は文体のテクニクとして使い分けているに過ぎない。文体に凝るということでは、上であげた「細目の

<sup>21</sup> 上でみたように、小林(1942)はこれを「復旧」と訳している。Reconstructionという用語にこだわってきたが、フランス語を含めて考えると、簡単ではないことがわかる。

事実を他の細目の事実引当てるのではなく、一個全体の言語体系を他の体系とをひきあてなければならぬ」とみると、「細目の事実」と「細目的事実」、「引当てる」と「ひきあて」、同じことを違って表現していることがみてとれる<sup>22</sup>。

最後にあげるサビアの木坂訳はこうした使い分けがなく、「再構」で統一されている。

半ばは再構し得るが、半ばは漠然と推量し得るに過ぎないこの「インド・ヨーロッパ語」または「アリア語」の最古の原型が、現在では大部分消滅してゐるために、われわれの限られた資料を以てしては、明らかな血族関係を認め得ないやうな言語となつてゐる大古の方言群のうちの、たゞ一つの方言でないと信ずるべき理由が、なんら無いのは当然である。(サビア 1943: 193)

このサビアの索引には「再構」があげられている。木坂も泉井同様、新村の門下生である。じつ、このサビアの序文は新村が書いている。新村譲りの「再構」とみてよさそうである。なお、戦後、サビアの泉井訳が出版されたが(サビア 1957)、その索引にも「再構」が見いだされる<sup>23</sup>。

以上、昭和初期の後世まで影響を与えた訳書のみてきたが、サビア以外は「再構」と「再建」が両立していることがあきらかになった。

<sup>22</sup> トムセン『言語学史』は泉井と高谷信一の訳であるが、「この未知の原語を再建する《rekonstruere》<sup>する</sup>にあつたのである」(トムセン 1937: 143)と、用語は「再建」である。このトムセン『言語学史』は1967年に再刊されるが、この「する」はそのまま直っていない。それどころか、「訳者の序」や日付の「一九三五年九月(一九三七年七月)」、「訳書のあとに」や「追記」、フォントに頁数までもがそのままである。違うのは表紙と背表紙だけで、表紙は1937年版では「言語学史」と「1937」が赤字になっていて、副題の「その主要点を辿りて」がついているが、1967年版では赤字もなく副題もない。背表紙は1967年版では「トムセン言語学史」と旧漢字から新漢字になっているが、「泉井久之助・高谷信一共譯」と「訳」だけが旧漢字が使われている。1967年版の奥付には「昭和四二年一〇月一〇日発行」とあって、1937年版への言及は一切ない。誠に不思議な本である。

泉井は「再構／再建」に関しては一貫性がない。本文でみたように、文体論的に言い換え可能だと考えていたのだろう。泉井は『比較言語学研究』と題する本を1949年に出しているが、筆者が見る範囲では「再建」も「再構」も登場しない。泉井の用語は独特で、「再現」が何度も登場するが、これは reflex の訳語である。たとえば、「トラック系の言語が、本来の p および b の音を、f によって再現されるのに対し、ポナベ語は u をもって再現し、マーシャル語も p に対しては u をもつて対応してゐる事実である」(泉井 1949: 24)とある。本来の p、b に \* が無いので再建形ではないので本来の p、b が何を意味するのかがわかりにくい。以下の例の方がわかりやすいだろう。「IE \*k<sup>w</sup> が Skr. c[ç], Gr. π として再現せられるのは IE 的に一応 normal な過程である」(泉井 1962: 2)。IE は印欧祖語で Skr. がサンスクリット、Gr. がギリシア語である。なお、泉井(1939: 184, 1947: 103, 1967: 121) (前記二冊はほぼ同じで、1967年版も前半は1947年版を基にしているが、後半に別の論考を加味している)では「再構様式」と、また泉井(1962: 10)には「共通原語態の再構とその音韻体系の設定」とそれぞれ「再構」が使われていることも記しておく。

<sup>23</sup> 木坂訳では索引に「再構」が三か所みえる。ところが、泉井訳には一か所しかない。他の二か所を確認したところ、泉井訳にも「再構」が使われている。そのことから、泉井訳の索引は完全ではないことがわかる。泉井訳の「訳者のことば」には「木坂君は昭和十八年夏、戦況次第に悲境に沈むころ、出征してフィリピンに渡り、ついに再び帰ることがなかった」と述べている。なお、サビアの泉井訳について、恩師池上二良先生が「なぜ訳者に木坂千秋の名前がないのか」と、普段めつたに立腹されることがない先生が怒りを示されていたのを思い出す。すでに木坂が戦死した以上、致し方ないとみる方が一般的だろうと思っていたので、驚いたことを記しておく。

## 6. 服部四郎の先行者たちの再建・再構

1983年、服部四郎は文化勲章を受章した。その祝賀会の様子などをまとめて、服部自身が『言語学ことはじめ』を刊行している。自分の研究は藤岡勝二の学恩がいかに大きいか、服部は祝辞の会で述べている。

では、藤岡は Reconstruction の訳語として何を使っているのか。

じつは、藤岡は多くの言語学書の翻訳をおこない、死後、ご家族が東京大学言語学研究室に寄贈している。どんな本が翻訳されているか、服部(1984)が書名をあげている。ホイットニー『言語のおいたち』やソシュール『一般言語学講義』、ガーベレンツ『言語学』など、かなりの数に及ぶ<sup>24</sup>。小林正人東大教授のご厚意で、そのいくつかを拝見させていただいたが、Reconstruction についていえば、ソシュールの訳が「再建」だったことを確認している。ただし、すべての訳語を見る時間も余裕もなかった。

この数々ある翻訳書の中からヴァンドリエス『言語学概論』だけが刊行されている。

藤岡勝二ご子息が巻末に「父の遺稿について」として、「幸に小倉進平博士、その他、亡父の功績記念会関係の諸先生の御厚志により本書が世にとはれる運びに至りました」と述べていることから、藤岡の死後、刀江書院に持ち込まれたものである<sup>25</sup>。そこには、「再建」が認められる。

ロマンス諸言語悉くに存するものは、その通りの事がラテン語中になくても、古典ラテン語とロマンス語との中間に当るラテン俗語と称する(よく知られてゐない)言語状態のなごりと思つてよいのである。ロマンス諸言語の比較方法が出来るので、それからこれ等諸言語とラテン語との継続してゐる直接関係がきめられるばかりでなく、その文法構造中に、記録がなかつたり又は乏しかつたりするあたりの言語状態を再建することも出来るのである。(ヴァンドリエス 1938: 471)

服部以前に、東大言語学科の教授を務めた人に、小倉進平(1882-1944)がいる。

小倉の東大授業『言語学概論』は国会図書館のデジタルライブラリーで読むことができる。いわゆるガリ刷りの手書きだが、十分読みやすい。デジタルライブラリーでは1935年から1938年までの『言語学概論』がダウンロードできるが、手元に1934年のものがあるので、それから引用する。いずれにおいても、小倉は Reconstruction を「再建」と訳している。

<sup>24</sup> 今はデジタル時代である。藤岡勝二の言語学書の翻訳草稿や満州語のノートなどデジタル化して、ぜひインターネットで公開していただきたい。日本言語学史にとっては、非常に重要なことである。なお、千田俊太郎京大准教授のご教示によると、ホイットニー原著、藤岡勝二邦訳『ことばのおひたち』が大阪大学図書館に所蔵されている。謄写版で、奥付けはないが、巻末に「東京プリント刊行会納」と書かれている。ホイットニー以外に他の著作が謄写版で配られたことがあるのかどうか、今後、調査が必要である。

<sup>25</sup> 服部(1984: 70)によると、「そのうちの一つだったに違いないが、右述の横山辰治君がヴァンドリエスの『言語』の先生の邦訳を刊行して、誤植が多いなどと、いろいろ問題を起こしたことがあった」と述べているが、藤岡勝二ご子息は「未定稿の儘を世に出すといふをこがましきは何としても堪へ難いことでもありますので、文学士、横山辰治君に依頼して内容索引の制作、訳語の統一、その他必要と認められる補足を行ひ内容の整理をしていただきました」とあり、服部の感想は少し乱暴すぎるように思うが、いかがだろうか。

それは Neogrammatiker (od. Junggrammatiker) である。彼等は説いて曰く、言語の心理学的研究に基礎を置く事は勿論であるが、其上に言語の歴史的事実を正確に比較研究して、インドゲルマン語の祖語を再建すべしと。(小倉 1934: 98)

筆者は「再構」を使用していたが、『言語学大辞典(術語編)』が「再建」としていることから「再建」に変えたことを、小論の冒頭で述べた。そういった用語の統一を促すような契機はなかったのだろうか。

1940年に出版された市河三喜編『英語学辞典』はどうだろうか。じじつ、川本茂雄は言語学の術語について、この辞典をあげて「座右におくと便利であろう」(川本 1955: 210)と指摘している。

この辞典の巻末には索引がある。索引の Reconstruction を引くと該当頁がある。項目としては、Indo-European Family があがっていて、その中に、『祖語の再構』と出てくる。その説明は以下の通りである。

インドヨーロッパ祖語 (primitive Indo-European language) は我々の知識の外にある。しかしそれがいかなるものであつたかは、この語族に属する多数の言語を比較することによつてほゞ察し得る。即ちインドヨーロッパ祖語の再構 (reconstruction) をなし得るのである。(市河編 1940: 495-496)

この辞典の「序」によると、言語学の担当は大塚高信と中島文雄であるが、「部分的に応援した人々」として、木坂千秋があがっている。大塚、中島は、比較言語学について関心があったとは思えないので、上の記述は木坂のものと考えてのが妥当である。すでにみたように、木坂はサピアの翻訳で「再構」を使っている。なお、この辞典には、音声学担当者として服部四郎も関わっていた。

上野(2018)がすでに指摘していることだが、服部自身も、戦前の論文では「再建」を用いている。たとえば、

琉球語が日本語の唯一の確実な同系語であることを繰返して強調したい。従つて、日本語と琉球語との比較研究によつて、これらの祖語である「原始日本語」を部分的に再建することができ、この再建された言語は、最古の文献である古事記や万葉集の日本語よりも遥かに古い点がある。(服部 1943: 297)

服部が戦前に発表した論文では、「再建」であつて「再構」はみられない。そこで、筆者は次のように推察するのだが、いかがだろうか。つまり「再建」から「再構」に変えたのはこの『英語学辞典』に依拠するようになったからではないか。

上野によれば「1955年ごろから「再構」に変わっていた」というので、少し時間的なずれが

あるのが気になる。戦後すぐの服部の論文の多くが、ローマ字の新日本式や音素に関するものなど、記述に関する論考が多かったので、「再建／再構」の問題が顕在化しなかっただけではないのか。今後、しっかりとした検証が必要なのかもしれない。

## 7. 服部四郎の同時代人の再建・再構

『英語学辞典』によって、言語学用語の訳語が完全に統一されたのだろうか。

話はそう簡単ではない。その後も、「再建」と「再構」は両方使われ続ける。とりわけ、印欧比較言語学の世界では、「再建」がずっと使われてきた。そこには高津春繁（1908-1973）の存在が大きかった。服部と同じ1908年に生まれ、一方はアジアでフィールドワークを重ね、アジアの言語を専門として、他方はオックスフォード大学に留学して、比較言語学を学び、ギリシア語など古典語を専門としてきた対照的な二人は、Reconstructionの訳でも歩み寄ることがなかった。

第二次大戦中の1942年に、高津は『比較言語学』を上梓している。そこではすべて「再建」である。目次をみただけでも、第一章第三節は「対応と再建」、第二章「共通基語の再建と語派の関係」、その第一節は「共通基語の発見と初期の再建への試み」、第二節「再建形の弱点」、第八節「共通基語再建の必要」、第九節「再建の可能性」と、まさに「再建」のオンパレードである。もちろん、邦字索引には「再建」と「再建形」が載っている。

戦後になって、高津は『岩波全書：比較言語学』を執筆しているが、この本は高津（1942）に基づいている。高津自身が「自序」でこう述べている。

なほ本書は昭和17年に同じ題名の下に出した著書を基として、その後の著者の考えの変わった点が多いので、書き改めたものである。殆んどすべての頁が改訂変更を経ており、殊に第3章以下が著しく変わっている。この際比較方法以外の私的な言語学的な説明の大部分を割愛し、その代わりに前著にはなかったもの、例えばこの方法による先史研究や語族分類方法等を挿入した。（高津1950:6）

全面的に書き直したものだが高津が言うが、こと「再建」に関していえば、そのまま使用されている。なお、この岩波全書を引き継ぐ形で、『比較言語学入門』と題名を変えて、岩波文庫に収録されている。ネット検索すると、在庫僅少となっているが、今日でも手に入る。

高津の後、東大で印欧言語学を講じたのが風間喜代三（1928-）である。

風間は一般的読者が多い岩波新書として、二冊本を書いている（風間1978, 1993）。印欧言語学の伝統というべきなのか、風間も「再建」を使用している。

祖語を少しでも具体的にとらえようとしたら、それは現存の資料をもっとよく調べて、その祖語を再現する方法を求めなければならない。これが比較方法における「再建」（reconstruction）の手続きである。もちろんわれわれは、失われた言語をすみずみまで回復し、それを再現することは絶対にできない。再建はあくまでも現存の資料に基づいた理論の産物

である。(風間 1978: 138)

1971年、高津春繁教授の退官記念として企画された本が紆余曲折を経て、服部四郎編『言語の系統と歴史』としてまとめられる<sup>26</sup>。この本では服部以外に14名の研究者が執筆している。「再構」としたのが、服部はじめ、亀井孝、徳永康元の三名、「再建」としたのは、風間喜代三、松本克己、井桁貞敏の三名である。

一番面白いのは河野六郎である。「再構」も「再建」も使わずに、次のように述べている。

中国語の音韻史研究はこれらの音韻史料の歴史的背景を絶えず考慮に入れつつ各時代の音韻体系を再構成し、又その変遷を究めるのであるが、具体的な復原には上述以外の様々な材料を駆使しなければならない。中国語音韻史の創建者である B. Karlgren はその名著 *Etudes sur la phonologie chinoise* において広韻を用いて体系の枠組みを設定し、その枠を充たすために現代諸方言及び日本・朝鮮・越南の漢字音を比較言語学的に考察し、切韻の reconstruction を試みた。(河野 1971: 311)

河野は「再構」と「再建」の訳語が並立していることをよく知っていたのであろう。この短い文章の中に、じつに「再構成」「復元」そして「reconstruction」と三度言い換えている。この本のタイトルは『言語の系統と歴史』であり、「再構・再建」にふれて当たり前なのに、あまり出てこないのは服部への遠慮があったのかもしれない。

服部は自分の教え子である風間や松本克己に対し、「再構」を押し付けることは決してしなかった。それは強調しても強調しすぎることはない事実である。

もう一つ、「再構」を押しつけなかった点を指摘しておこう。

サビア『言語』のように、『言語』をタイトルとした本を執筆した言語学者がいる。ブルームフィールドである。チョムスキー旋風が吹き荒れる以前に、アメリカで最も影響力があった言語学者の一人である。その『言語』の翻訳(1962)をみると、Reconstruction は「再建」である。服部はその本の「序」を執筆している。しかし、「再構」と直すように要求していない。服部のこうしたある種の寛容さが死後出版された本のタイトルをして「再建」をつけさせる一因となったのかもしれない。

## 8. 国語学会機関誌『国語学』に掲載された論文

国立国語研究所が現日本語学会(旧国語学会)の旧機関誌『国語学』の全文データベースを公

<sup>26</sup> 上野東大名誉教授から、服部の次の言葉が、本文で述べられていることを考える上で重要だと指摘を受けた。服部(1971: iii)は「はしがき」で「私の名前は全く名義上のもので、執筆者を選定したわけでもなければ、他の書物の場合のように“監修”したわけでもない。また、論文によっては、その内容が本書の目標からはずれたり、範囲が狭くなりすぎたものもあるが、いずれも全く各人の自由意志による。私はほとんど原稿の催促掛り一しかも不手際な催促掛りとなったに過ぎない」と述べている。

開している<sup>27</sup>。それを使って、「再構」と「再建」の使用頻度をみておこう。ただし、「再構」だけで検索すると「再構成」も含まれるので、「再構」から「再構成」を引いておく必要がある。

以下がその結果である。

表1 雑誌『国語学』における「再構」「再建」の使用頻度

	再構	再建
1950-59	10	17
1960-69	15	9
1970-79	24	5
1980-89	16	6
1990-99	27	12

1950年代では「再建」が「再構」を上回っているが、1960年代に逆転し、1970年代では「再構」が圧倒している。上野が指摘するように、服部が「当初は一般的な用語の「再建」を使っていたが、1955年ごろから「再構」に変わっていた」とすれば、この『国語学』の結果も軌を一にする。

何度とも言うようで恐縮だが、服部は「再建」から「再構」に変え、それを『日本祖語の再建』のタイトルにするまで一貫して「再構」を使ってきた。ところが、まったく服部と逆の動きをした国語学者がいる。亀井孝(1912-1995)である。『国語学』の検索からそれがあきらかとなった。

亀井(1950)では以下のように「再構」を使っているが、亀井(1954a)では「再建」となっている。続けて、引用しておく。

厳密には、過去の音声は、もはや、不明だからである。なんとなれば、それは、解釈の対象としては取り上げても、直接に実験してみることはできないからである。しかし、勿論、右の四つの記号の本体が、音韻論的項の一枝として機能する所の、その実質的内容の再構をすることを、わたくしは、拒むものではない。再構は、歴史的な解釈である。(亀井 1950: 85)

もし、朝鮮語 *turumi* をトルコ語の形 *turna torna* に比べれば、これらから再建される原形には *r* が含まれてゐたものと推定され、したがつて、日本語の「ツル」の *r* も、また直接これに対応するものと考へられるかもしれない。しかし、「ツル」については、それほど簡単な取扱ひはできないのである。(亀井 1954a: 5)

1954年以降に、『国語学』に掲載された論文(亀井 1954b, 1959a, b, c)を全文検索してみると、すべて「再建」である。一方、『国語学』以外の論文を見てみると、1954年以前の論文(亀井

<sup>27</sup> 日本言語学会の機関誌『言語研究』もデータベースを公開しているが、こちらはPDFのダウンロードができるだけで、全文検索などはできない。PDFにも検索機能があるが、いちいちすべての論文をダウンロードして検索をすることはしなかった。また、そこまでのようなテーマではない。

1946, 1949a, 1949b) はすべて「再構」である。亀井 (1954a: 1) で、「一九五〇年から五三年にかけて、まる三年、母国をるすにし、その間を、主として、英国にすごした」と述べていることから、この留学以後、「再構」から「再建」に変えたことになる。不思議なことに、これは服部四郎が「再建」から「再構」に変えた時期と同じである<sup>28</sup>。

ただし、亀井のすべての論文を検索したわけではない。また、1950年代以降、一切「再構」を使わなかったわけではない。上であげた服部編 (1971) でも、「再構」を使っているし、亀井が中心になってまとめた『日本語の歴史』にも「再構」がみえる。

理論的にいえば、原日本語は、方法論のために設定される仮構の概念である。琉球語があるのではないかという人もあろうが、これをたよりにして原日本語を再構することは、むしろ困難である。(亀井・大藤・山田編 1963: 287)

この一文を引用したのは単に「再構」が用いられていることを示すだけではない。この文言自体が「日本祖語」を琉球語とともに「再構」しようとした服部四郎への当てつけのようにみえるからだ。

ただし、『日本語の歴史』は亀井一人が書いたのではない。亀井は「あとがき」でこう述べている。

これも問題として明示的に語っておきたいことは、本書のような書物の編述の方策についてである。このような計画にあたって、従来、一般にとられてきたのは、〈講座〉とよばれて世にひろめられた形式である。これは、各人が各項目について責任をもって書いたものを並べつつ、そこに企画のねらうその全体像を押し出してゆく方式である。また、もう一つは、〈講座〉の形式よりもあたらしい〈リライト〉とよばれる形式である。これは、編集の母体が、内容にわたってまで主導的な立場をとるやり方である。根本において、本書は後者の方針をとった。(亀井 1963: 422-423)

亀井孝と河野六郎は小学校以来の同級生だという。服部とは4つ違いの二人は服部の「再構」を意識し、それぞれが独自の反応を示したことになる。

## 9. おわりに

小論は「再建」を使うべきか、「再構」とすべきか、自分自身が悩んだことから出発し、上野による、服部 (2018) のタイトルを見た時の衝撃を契機として、日本言語学史上の Reconstruction

<sup>28</sup> これが偶然なのか、意図したものなのか。神のみぞ知るだが、亀井 (1992: 123) が服部を翻案言語学者と揶揄したり、服部四郎『言語学の方法』の書評を書いた亀井とやり取りがあったり、「服部さんは、わたくしのことを樹を見て林をみないかのようにおっしゃるが、これは、下世話にいう“目くそはなくそをわらう”のたぐいであらうか」亀井 (1961: 12) と述べるなど、かなり意識していたことだけは間違いない。

の訳語を振り返ってみた。「再造」「再現出」など、「再構」「再建」以外にも、いろいろな用語が登場している。また、西田龍雄の「再構成」や村山七郎の「復元」など<sup>29</sup>、小論で取り上げなかった訳語も多い。しかし、小論は Reconstruction の訳語をすべてあげるのが目的ではない。訳語が言語学用語として行き渡る過程をみることで、いかにして訳語が定着していくのか、それを言語学史の一断面として描きたかったのである。この『日本祖語の再建』によって、ますます「再建」が定着し、「再構」は忘れ去られていくのかもしれない。それを言語学用語の定着とみるのか、「再構」派（というものがあるわけではないが）の敗北とみるのか、人それぞれの見方があるろう。また一つ時代が進んだのだと前向きにとらえるしかない。

さいごに、言語学者の先人たちの言葉を引用しておきたい。

かつて「子音・父音」の両方がコンソナントの訳語として並立していた時代<sup>30</sup>、『言語学雑誌』の雑報のところに、こんな問答があった。少し長くなるが、引用しておく。

Consonant は子音と称し或は父音と訳す。何れが正しく候哉。

どちらにしても、比喩的な訳語で、適当とは言はれませぬ。或は之を発声と称へてる人もありますが、其も亦不都合です。『広日本文典別記』七節（七頁）に於て、大槻博士は子音又は父音の訳語を排斥して、発声といふ、語を用ゐられてゐますが、元来みな名目上の議論で、三個の用語ともコンソナントといふもの、性質に適切な名称ではないのです。子とか父とか発とか又は母と言つても自分の性質を代表してゐる称号ではなくて、他のものに対する関係上から命名された称号でありますから、或時は子音といふ名の不都合な場合があり、父音といふ名の不都合な場合があり、又は発声といつても不当なをりがあります。ですから、そんな名目に拘泥するよりはコンソナントの性質そのものを認識して、其の名称には子音とでも、父音とでも、発声とでも付けるが善いので、何も一々語源のせんさくだてをして子でもない、父でもないなど、民法でもかつき出すやうな事をするには及ばないと思ひます。声音学上コンソナントの性質さへわかれば、多数の学者の慣例に従つておいて、差支ないではありませんか。勿論現行の日本文典ではまだその中の一個に定まらないやうですが、その辺はまあ好加減に折合つてもらひたいものです。然し吾々は旧訳に由つて子音といふ名を用ゐてをります。（『言語学雑誌』（1900）雑報 1(3): 119）

雑報なので、誰が書いたのかはわからない。新村、藤岡、八杉あたりが書いたものと思われる。言語学者の立場をうまく説明している。この説明に倣い、こんな言をもって、小論を終える。

<sup>29</sup> 西夏文字の解説に取り組んだ西田龍雄は「西夏文字の読み方を解きあかす手続を、「西夏語音の再構成」とよんでよいであろう」（西田 1967: 62）と述べている。比較による再建とは違う意味を持たせているのであろう。日本語系統論を生涯の研究テーマとした村山七郎は、『日本語の研究』のなかで「1）祖語形をいかに復元するのか」（村山 1974: 33-53）と節を立て、復元形とともに、使用している。ただし、西田や村山の訳語変遷については調べてはいない。なお、大野晋は「「再建形」なるものは、学者それぞれによって相違する。それは fiction だからである」（大野 1996: 222）として、再建それ自体を否定している。それがいかにおかしいことかを長田（1998）で論じたことがある。

<sup>30</sup> 「父音・子音・発声」の Consonant の訳語問題については内田（2017）、阿久津（2018）などがある。

Reconstruction の意味さえわかれば、多数の学者の慣例に従っておいて、差し支えないではありませんか。しかし、われわれは『言語学大辞典（術語編）』によって「再建」を用いております。

## 参考文献

- 阿久津智 (2018) 「[母音]、[子音]、[音節] という用語について」『拓殖大学語学研究』137: 123-147.
- 安藤正次 (1924) 『小さい国語学』東京：広文堂書店.
- 安藤正次 (1926) 『言語学概論』東京：早稲田大学出版部.
- 安藤正次 (1948) 『国語学』東京：三省堂.
- イエスベルセン、新村出訳 (1901) 『イエスベルセン氏言語進歩論』東京：東京専門学校出版部.
- 井桁貞敏 (1971) 「スラヴ語」服部四郎 (編) (1971) 155-172.
- 泉井久之助 (1928a) 「小林英夫氏訳 ソツスユール言語学原論を讀みて (上)」『京都帝国大学新聞』75: 4.
- 泉井久之助 (1928b) 「小林英夫氏訳 ソツスユール言語学原論を讀みて (下)」『京都帝国大学新聞』76: 4.
- 泉井久之助 (1939) 『言語の構造』京都：弘文堂.
- 泉井久之助 (1947) 『言語構造論』大阪：創元社.
- 泉井久之助 (1949) 『比較言語学研究』大阪：創元社.
- 泉井久之助 (1951) 「私の処女出版」『学園新聞』867: 2.
- 泉井久之助 (1962) 「言語比較における音韻対応関係設定の不確定性について—印欧語と主としてハワイ語に関して—」『言語研究』41: 1-13.
- 泉井久之助 (1967) 『言語の構造』東京：紀伊国屋書店.
- 市河三喜 (編) (1940) 『英語学辞典』東京：研究社.
- 伊藤正雄 (2001) 『新版忘れ得ぬ国文学者たち』東京：右文書院.
- ヴァンドリエス、藤岡勝二訳 (1938) 『言語学概論—言語研究と歴史—』東京：刀江書院.
- 内田智子 (2017) 「広文典における音声分析」『長崎国際大学論叢』17: 1-11.
- 上野善道 (2018) 「補注者あとがき」服部四郎『日本祖語の再建』641-645. 東京：岩波書店.
- 円地文子 (1984) 『うそ・まこと七十余年』東京：日本経済新聞社.
- 大野晋 (1996) 「『タミル語=日本語同系説に対する批判』を検証する」『日本研究』15: 248-186.
- 岡倉由三郎 (1890) 『日本語学一斑』東京：明治義会.
- 岡倉由三郎 (1892) 『比較博言学』東京：明治義会.
- 小倉進平 (1934) 『言語学概論』東京：啓明社.
- 長田俊樹 (1991) 「インド東部チョターナーグプル地方における言語幅合について」『内陸アジア言語の研究』6: 143-177.
- 長田俊樹 (1997) 「ムンダ語族比較言語学研究序論」『日本研究』16: 288-267.
- 長田俊樹 (1998) 「比較言語学・遠隔系統論・多角比較—大野教授の反論を讀んで—」『日本研究』17: 404-373.
- 長田俊樹 (2003) 「日本語系統論はなぜはやらなくなったのか」ヴォヴィン・長田編『日本語系統論の現在』373-418. 京都：国際日本文化研究センター.
- 長田俊樹 (2005) 「日本語の混淆言語説」井波律子・井上章一編『日文研叢書：表現における越境と混淆』169-182. 京都：国際日本文化研究センター.
- 長田俊樹 (2011) 「『日本語再建私説』解題」『KOTONOHA』100: 1-2.
- 長田俊樹 (2015) 「庄垣内さんの思い出」『言語記述論集』7: 225-232.
- 長田俊樹 (2017) 「はたして言語学者はふがいないのか—日本語系統論の一断面」井上章一編『学問をしるもの』10-29. 京都：思文閣出版.
- 長田俊樹 (2020) 「日本語の起源はどのように論じられてきたか—日本言語学史序説」長田編『日本語「起源」論の歴史と展望』315-334. 東京：三省堂.
- 長田俊樹 (編) (2020) 『日本語「起源」論の歴史と展望』東京：三省堂.
- 長田夏樹 (1939) 「日本語再建私説」『武蔵野』(東京府立第二中学校校友会) 50: 27-29. (2011『KOTONOHA』(古代文字資料館) 100: 3-5 に再録)
- 長田夏樹 (1972) 『原始日本語研究—日本語系統論への試み』神戸：神戸学術出版.
- 風間喜代三 (1971) 「印欧諸語の関係とその故郷」服部四郎 (編) (1971) 69-91.
- 風間喜代三 (1978) 『岩波新書：言語学の誕生』東京：岩波書店.

- 風間喜代三 (1993) 『岩波新書：印欧語の故郷を探る』 東京：岩波書店。
- 亀井孝 (1946) 「いはゆる「言語学的古生物学」の成立」『一橋論叢』 16(1/2): 48-72.
- 亀井孝 (1949a) 「日本語系統論の問題 (上)」『一橋論叢』 21(5/6): 218-246.
- 亀井孝 (1949b) 「日本語系統論の問題 (下)」『一橋論叢』 22(2): 387-409.
- 亀井孝 (1950) 「蜷縮涼鼓集を中心にみた四つがな」『国語学』 4: 75-88.
- 亀井孝 (1954a) 「「ツル」と「イト」—日本語の系統の問題を考へる上の参考として—」『国語学』 16: 1-21.
- 亀井孝 (1954b) 「国語の変遷と歴史」『国語学』 17: 10-16.
- 亀井孝 (1959a) 「意味の変化と表現価値」『国語学』 37: 102-104.
- 亀井孝 (1959b) 「春鶯囀」『国語学』 39: 1-7.
- 亀井孝 (1959c) 「虹二題」『国語学』 39: 105-110.
- 亀井孝 (1961) 「意味のはなし」『言語研究』 40: 1-21.
- 亀井孝 (1963) 「あとがき」 亀井孝・大藤時彦・山田俊雄 (編集委員) (1963) 『平凡社ライブラリー—日本語の歴史 1 民族のこぼの誕生』 421-423, 東京：平凡社.
- 亀井孝 (1971) 「言語の歴史」 服部四郎 (編) (1971) 23-48.
- 亀井孝 (1992) 『亀井孝論文集 6 言語・諸言語・倭族語』 東京：吉川弘文館.
- 亀井孝・大藤時彦・山田俊雄 (編集委員) (1963) 『平凡社ライブラリー—日本語の歴史 1 民族のこぼの誕生』 東京：平凡社.
- 亀井孝・千野栄一・河野六郎 (編) (1995) 『言語学大辞典第 6 卷 術語編』 東京：三省堂.
- 川本茂雄 (1955) 『言語学概説』 東京：淡路書房.
- 京都大学大学院人間・環境学研究科 山口研究室 (編) (1997) 「泉井久之助著書論文目録」『Dynamis: ことばと文化』 1: 150-165.
- 楠家重敏 (1986) 『ネズミはまだ生きている—チェンバレンの伝記』 東京：雄松堂出版.
- グリーンバーグ, 安藤貞雄訳 (1973) 『人類言語学入門』 東京：大修館書店.
- 江実 (1935) 『国語科学講座 VII 言語地理学』 東京：明治書院.
- 高津春繁 (1942) 『文化科学叢書：比較言語学』 東京：河出書房.
- 高津春繁 (1950) 『岩波全書：比較言語学』 東京：岩波書店.
- 高津春繁 (1992) 『岩波文庫：比較言語学入門』 東京：岩波書店.
- 河野六郎 (1971) 「中国語・朝鮮語」 服部四郎 (編) (1971) 303-322.
- 小林淳男 (1933) 『国語科学講座 I 言語学史』 東京：明治書院.
- 小林英夫 (1937) 『言語学通論』 東京：三省堂.
- 小林英夫 (1942) 「言語学原論注釈」『言語研究』 10-11: 69-124.
- 崎山理 (2014) 「新日本語学者列伝：泉井久之助」『日本語学』 33(2): 88-99.
- サピア, 木坂千秋訳 (1943) 『言語—ことばの研究序説』 東京：刀江書院.
- サピア, 泉井久之助訳 (1957) 『言語』 東京：紀伊国屋書店.
- サピア, 安藤貞雄訳 (1998) 『言語：ことばの研究序説』 (岩波文庫) 東京：岩波書店.
- 柴田武 (1975) 「序文」 新村出筆録・柴田武校訂『上田万年 言語学』 (1) - (4) 東京：教育出版.
- 新村出 (1933a) 『続国文学講座：言語学概説』 京都：文献書院.
- 新村出 (1933b) 『岩波講座日本文学：言語学概論』 東京：岩波書店.
- 新村出 (1935a) 『国文学大講座：言語学概論』 東京：日本文学社.
- 新村出 (1935b) 『国語科学講座 IV 国語系統論』 東京：明治書院.
- 新村出 (1943) 『言語学序説』 京都：星野書店.
- 新村出 (1954) 『言語学序説 (改訂版)』 京都：星野書店.
- スウィート, 金田一京助訳 (1912) 『新言語学』 東京：子文社.
- ストロング, 八杉貞利訳 (1901) 『ストロング氏言語史綱要』 東京：東京専門学校出版部.
- セース, 上田万年・金沢庄三郎共訳 (1898) 『言語学』 東京：金港堂.
- ソシュール, 小林英夫訳 (1940) 『改訳新版 言語学原論』 東京：岩波書店.
- ソシュール, 小林英夫訳 (1972) 『一般言語学講義』 東京：岩波書店.
- ソシュール, 山内貴美夫訳 (1976) 『ソシュール一般言語学講義校注』 東京：而立書房.
- ソシュール, 前田英樹訳注 (1991) 『ソシュール講義録注解』 東京：法政大学出版会.
- ソシュール, 町田健訳 (2016) 『新訳 ソシュール一般言語学講義』 東京：研究社.
- ソッスユール, 小林英夫訳 (1928) 『言語学原論』 東京：岡書院.
- 辻直四郎 (1967) 『岩波新書：インド文明の曙』 東京：岩波書店.

- 徳永康元 (1971) 「ウラル語族」服部四郎 (編) (1971) 227-246.
- 徳永康元 (1970) 「八杉先生と言語学」八杉貞利『新県居雑記』351-353, 東京: 吾妻書房.
- 匿名 (1900) 「雑報」『言語学雑誌』1(3): 119.
- トムセン, 泉井久之助・高谷信一共訳 (1937) 『言語学史』京都: 弘文堂書房.
- トムセン, 泉井久之助・高谷信一共訳 (1967) 『言語学史』東京: 清水弘文堂書房.
- 西田龍雄 (1967) 『西夏文字』東京: 紀伊国屋書店.
- 服部四郎 (1943) 『蒙古とその言語』東京: 湯川弘文社.
- 服部四郎 (1959) 『日本語の系統』東京: 岩波書店. (岩波文庫で1999年に再刊)
- 服部四郎 (1971) 「比較方法」服部四郎 (編) (1971) 1-22.
- 服部四郎 (編) (1971) 『言語の系統と歴史』東京: 岩波書店.
- 服部四郎 (編) (1984) 『言語学ことはじめ』私家版.
- 服部四郎, 上野善道補注 (2018) 『日本祖語の再建』東京: 岩波書店.
- フィルモア, 田中春美訳 (1988) 『格文法の原理一言語の意味と構造』東京: 三省堂.
- 福井久蔵 (1942) 『国語学史』東京: 厚生閣.
- 福島 (辻) 直四郎 (1934) 『国語科学講座 I 比較言語学』東京: 明治書院.
- 福島 (辻) 直四郎 (1935) 『岩波講座東洋思潮: 印度言語の系統』東京: 岩波書店.
- 藤岡勝二 (1900) 『哲学館講義: 言語学』(国会図書館デジタルライブラリー).
- 藤岡勝二 (1907) 『国語研究法』東京: 三省堂.
- ブルームフィールド, 服部四郎序, 三宅鴻・日野資純共訳 (1962) 『言語』東京: 大修館書店.
- 古田東朔 (1984) 「解説」『上田万年 国語学史』271-328. 東京: 教育出版.
- ベデルセン, 伊東只正訳 (1974) 『言語学史』東京: こびあん書房.
- ホイットニー, 保科孝一訳 (1899) 『言語発達論』東京: 富山房.
- 保科孝一 (1900) 『言語学大意』東京: 国語伝習所.
- 保科孝一 (1902) 『言語学講話』東京: 宝永館書店.
- 堀川貴司 (1992) 「チェンバレン帝大教師時代の資料」『汲古』21: 16-20.
- 松本克己 (1971) 「ギリシア語の歴史—特に方言の形成とその系統関係について—」服部四郎 (編) (1971) 111-139.
- 宮田修 (= 八杉貞利) (1899) 『通俗百科全書第拾巻編: 通俗言語学』東京: 博文館.
- ミュラー, マクス, 金沢庄三郎・後藤朝太郎 (1906) 『帝国百科全書: 言語学上』東京: 博文館.
- ミュラー, マクス, 金沢庄三郎・後藤朝太郎 (1907) 『帝国百科全書: 言語学下』東京: 博文館.
- 村山七郎 (1974) 『日本語の研究法』東京: 弘文堂.
- メイユ, アントワス, 泉井久之助訳 (1934) 『史的言語学に於ける比較の方法』京都: 政経書院.
- メイユ, アントワス, 泉井久之助訳 (1977) 『史的言語学における比較の方法』東京: みすず書房.
- ロウピンズ, 中村完・後藤齊訳 (1992) 『言語学史』東京: 研究社.
- ロブスチード (羅布存徳) 原著, 井上哲次郎訂増 (1883) 『増訂英華字典』東京: 藤本次右衛門.
- Fillmore, Charles J. (1968) The case for case In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds) *Universals in linguistic theory*. 1-88. London: Holt, Rinehart and Winston.
- Jespersen, Otto (1894) *Progress in language with special reference to English*. London: Swan Sonnenschein.
- Lamb, Sydney M. (1966) *Outline of stratificational grammar*. Georgetown: Georgetown University Press.
- Lobsheid, William (1866-69) *English and Chinese dictionary: With the Punti and Mandarin pronunciation*. Hong Kong: Daily press office.
- Max-Müller, Friedrich (1885) *The science of languages*. London: Longman & Green.
- Meillet, Antoine (1925) *La méthode comparative en linguistique historique*. Oslo: Aschehog.
- Müller, Friedrich (1876) *Grundriss der Sprachwissenschaft, Band. I. Einleitung in die Sprachwissenschaft*. Wien: Alfred Hölder.
- Osada Toshiki (1991) Notes on linguistic convergence in the Chotanagpur area, In Sanjay Bosu-Mullick (ed.) *Cultural Chotanagpur: Unity and diversity*. 99-119. Delhi: Uppal Publisher.
- Paul, Hermann (1880) *Prinzipien der Sprachgeschichte*. Halle: Max Niemeyer. (福本喜之助 (1965) 『言語史原理』東京: 講談社).
- Sayce, A. H. (1874) *The principles of the comparative philology*. London: Trübner.
- Starosta, Stanley (1967) *Sora syntax: A generative approach to a Munda language*. Ph. D. Dissertation. Madison: University of Wisconsin.

Starosta, Stanley (1988) *The case for lexicase: An outline of lexicase grammatical theory*. London: Pinter.

Strong, Herbert A. (1888) *Principles of the history of language*. London: Swan Sonnenschein, Lowry. (Paul (1880) の英訳本).

Sweet, Henry (1900) *The history of language*. London: Bedford.

Whitney, William D. (1875) *Life and growth of languages*, New York: Appleton.

## Reconsideration of Reconstruction: Notes on the History of Linguistics in Japan

OSADA Toshiki

Invited Professor, Language Variation Division, Research Department, NINJAL

### Abstract

The term “reconstruction” in historical linguistics has been translated into Japanese in two ways: SAIKEN and SAIKŌ. Shirō Hattori mainly used SAIKŌ for “reconstruction,” which Zendō Uwano considered to have been coined by Hattori. However, the title of his posthumous publication is SAIKEN. Thus, I reexamined the use of this term in the history of linguistics in Japan, finding that Hideo Kobayashi, who translated the famed *Cours de linguistique générale* by Saussure into Japanese, was the first to use the term SAIKŌ, and then Hisanosuke Izui and Izuru Shinmura of Kyoto University adopted this term in 1930.

**Keywords:** Reconstruction, SAIKEN, SAIKŌ, Shirō Hattori, History of linguistics in Japan